

自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 X(2)

—養護学校高等部の自閉症者について—

渡部 匡隆*・木戸 能里子**・衛藤 裕司***・小林 重雄*

就学前に当研究室で治療訓練を受け、特殊学級及び養護学校に就学した6名の自閉症者について、養護学校高等部2年あるいは3年時の学校適応の状況を報告した。調査では、標準化された検査、学校見学、及び担任や母親へのインタビューを行った。検査結果から、各症例に中度から重度の知的な遅れが認められた。また適応行動尺度から良好な結果が示された。学校場面では、指示理解や課題の遂行はかなり改善されてきていた。しかし、対人関係の問題や問題行動は現在も継続して認められた。各症例とも意志の伝達に問題が認められ、4名の症例は音声言語の表出が困難であった。高等部卒業予定の4名のうち、3名は地域作業所に入所予定であった。これらの結果から、長期的な展望にたつ治療・訓練プログラムの必要性和、そのプログラムの一貫した適用の重要性が示唆された。

キー・ワード：自閉症児 追跡研究 学校適応

I. 目的

著者らは、就学前に当研究室で治療・訓練を受けた自閉性障害児の学校適応について追跡調査を行ってきた(杉山・反保・田中・張・池・小林・長畑・斉藤, 1979¹³⁾; 大野・杉山・張・田中・小林, 1980⁹⁾; 大野・徳増・中矢・是永・杉山・池・小林, 1981¹⁰⁾; 武蔵・大野・徳増・中矢・平田・鈴田・古田・石川・五十嵐・池・小林, 1983⁹⁾; 大野・古田・平田・森田・武蔵・鈴田・小林, 1984¹¹⁾; 古田・中矢・武蔵・森田・辻・大野・前川・小林, 1985¹⁾; 中矢・武蔵・福島・大野・前川・小林, 1986⁷⁾; 中矢・杉山・前川・小林, 1987⁸⁾; 渡部・中矢・前川・小林, 1988¹⁹⁾)。

本報告の対象は、就学前に当研究室で治療・訓練を受け、就学時に特殊学級及び養護学校に処置された症例である。本追跡研究が開始され

てから12年が経過し、各症例は養護学校高等部卒業の段階を迎えている。

ここでは本研究の第10報として、養護学校高等部2・3年生段階での学校適応の状況を調査し、一連の追跡研究で問題とされてきた自閉性障害児の行動特徴が、養護学校終了時期にどのような推移してきているかを報告する。

II. 方法

1. 調査対象

本報告の対象は、養護学校高等部に在籍している6名の症例である。各症例の詳細はTable 1に示した。

2. 調査内容

各症例の評価のために、以下の手続きを用いた。①標準化された検査、②学校見学、③担任や母親とのインタビューである。

検査は、知的水準や言語能力の評価のために、田中ビネー検査¹⁴⁾・人物画検査(DAM)³⁾・絵画語彙検査(PVT)¹⁷⁾を用い、社会適応状況の把握

*心身障害学系

**心身障害学研究科

***教育研究科

のために適応行動尺度 (ABS)¹⁵⁾を用いた。

学校見学と担任や母親へのインタビューは、大野・杉山ら (1980⁹⁾) に従い、課題遂行・指示理解、対人的な関わり、言語・コミュニケーション、問題行動などの点から予め見学内容やインタビューのポイントについて打ち合わせて実施した。また、多くの症例が職場実習を行っており、可能な場合は職場見学を行い上司や同僚にインタビューを行った。

3. 調査期間と調査状況

(1) 検査

筑波大学学校教育部において平成元年8月末に一斉に行った。各症例に予め連絡を取り、都合のよい日時を決定してから実施した。3名はこの時期に検査を実施できなかった。そのため、1名は学校訪問に合わせて行い、残りの2名は今回検査を実施することができなかった。

(2) 学校見学と職場見学

平成元年度2学期中に行った。実施にあたっては、職場実習期間中である本学期に行うようにした。5名の症例の見学を行ったが、症例1については時間的な都合が合わず実施することができなかった。

(3) 担任・母親へのインタビュー

母親へのインタビューは、先の検査実施期間中に実施した。この時期に検査ができなかった3名の症例のうち、2名は学校見学の際に行い、他の1名については電話でのインタビューを行った。担任とのインタビューは、学校見学を行った平成元年2学期中に行った。インタビューは、5名の症例について行った。1名は学校見学ができなかったために実施できなかった。

4. 記録

学校見学や職場見学の記録は以下のように行った。見学に2名以上のスタッフが同行し、事前に観察のポイントを打ち合せた後、独立して観察・記録を行った。見学終了後にその結果を照らし合わせて記録をまとめた。

先に、各症例のプロフィールと検査結果について報告する。続いて、学校見学や職場見学の状況について報告を行う。

1. 症例の概要

症例は、4名 (男子3名、女子1名) が養護学校高等部3年生であり、2名 (女子2名) が高等部2年生であった。症例の生育歴、就学前の状況と訓練の様子、就学と就学後からこれまでの主な経過について Table 1 に示した。高等部2年生の症例6は、中学校情緒学級から養護学校高等部に進学した。その結果、全症例が養護学校高等部で教育を受けることになった。

2. 検査結果

今回の調査から得られた検査結果を Table 2 に示した。

田中ビネー検査の精神年齢は、音声言語をもたない症例2と症例3において2歳5カ月、3歳0カ月であった。3語文程度の発話が可能な症例4は7歳6カ月、ほぼ日常的な会話が成立する症例6では11歳6カ月であった。

人物画検査 (DAM) の結果は、症例2は5歳9カ月、症例3は7歳11カ月であった。症例4は9歳2カ月であり、症例6はかなり詳細な人物画を描写でき上限である12歳6カ月に達していた。全体的には、田中ビネー検査よりも3から4歳程度高い精神年齢を示していた。

絵画語彙検査 (PVT) は、症例2は3歳2カ月、症例3は2歳0カ月であった。症例4は6歳9カ月、症例6は11歳4カ月であった。

適応行動尺度 (ABS) のプロフィールを Fig. 1 に示した。第1部では、責任感や社会性などの領域が低くなっているが、各症例とも標準より良好な値を示していた。知的に高いほど平均に近く、逆に、知的に低い症例はかなり高い得点であった。第2部では、各症例ともほぼ平均から7点前後の値であった。症例3は不快な言語習慣、症例4は適切でない言語的習慣の領域で低い値を示していた。症例6は、これらの領域に加えて自傷行動の面でも低い値であった。全体的には、ほぼ知的レベルに相応した標準的な値であった。

III. 結果

Table 1 症例の概要

	症例 1	症例 2	症例 3	症例 4	症例 5	症例 6
性別	男子	男子	男子	女子	女子	女子
生年月日	1970.5 (19:7)	1970.11 (18:9)	1971.1 (18:7)	1971.5 (18:6)	1971.12 (17:8)	1971.12 (17:8)
主訴	言葉の遅れ 集団行動がとれない	言葉がない 落ち着きがない	言葉がない 人に無関心	言葉の遅れ 落ち着きがない	全体的な遅れ 言葉がない 人の顔を見ない	集団適応がよくない 先生の指示に従えない
生育歴	妊娠中・出産 時間問題なし 8カ月頃喃語 始歩1歳2 歳頃言葉が増える 2歳半頃言葉が消失する	妊娠中・出産 時間問題なし 乳児期は手が かからない 始歩1歳2 歳頃から視線 が合わなくなる	妊娠中問題なし 鉗子分娩 手のかからない 子 始歩13カ月	流産予防の注 射を受ける 逆子で出産 乳児期はおと なしい子 始歩10カ月	妊娠中・出産 時間問題なし 乳児期は、手 がかからない 子 あやしても反応がない 始歩16カ月	黄体ホルモン 服用 帝王切 開 始歩10カ 月 始語1歳2カ 月
面接時の状況	1977.6 (7:1) 落ち着きがなく 奇声が多い 簡単な指示に従える。言葉は単語レベル。平仮が少し読める	1976.9 (5:10) 多動で、言葉がない。簡単な指示に従える。発声は緊張を伴った吐き出すような音である	1975.10 (4:9) 発語はなく、発声は緊張音のみ理解語はない。ドアへのこだわり。表情は固く人に無関心	1972.2 (0:9) 多動。呼びかけに反応なし。拒否が強く、接近すると奇声を発して逃げる	1976.7 (5:7) 多動。呼びかけに反応なし。発声は奇声のみ。人に対する回避反応が顕著	
訓練期間と訓練内容	1年6カ月 言語、数の訓練	2年6カ月 学習態度の形成 言語訓練	3年7カ月 学習態度の形成 聴覚入力系の問題のため、文字指文字を中心とした言語訓練	4年1カ月 学習態度の形成 言語、数の訓練	4年8カ月 学習態度の形成 言語訓練	3年7カ月 言語訓練
就学猶予の有無	猶予：自宅近所の学校に受け入れ学級がない	猶予：言葉がなく、落ち着きがない	猶予：聞き取りに問題があるため	猶予なし	猶予：児童相談所の判断、両親の希望	猶予：
就学状況 小学校期	小学校一般学級 促進学級通級(1年次) 促進学級在籍(4年次)	小学校特殊学級入学(1年次) 一般学級への通級開始(2年次) 一般学級への通級中止(4年次)	小学校一般学級(1年次) 養護学校へ転校(3年次)	小学校一般学級(1年次)	養護学校小学部(1年次)	小学校一般学級 情緒学級通級(1年次)
中学校期	中学校特殊学級	養護学校中学部	養護学校中学部	中学校特殊学級	養護学校中学部	中学校情緒学級
高等学校期	養護学校高等部	養護学校高等部	養護学校高等部	私立養護学校	養護学校高等部	養護学校高等部
現在の状況	高等部3年生	高等部3年生	高等部3年生	高等部3年生	高等部2年生	高等部2年生

3. 各症例の学校・職場実習の状況

(1) 症例 1 (M.M.)

養護学校高等部3年生である。検査、学校訪問とも実施できなかったため、母親との電話インタビューを行った。職場実習を作業所で行っており、簡単な機械の組み立てを行っている。作業は特に問題なく取り組んでいる。しかし、2年生後半から学校や家庭でときどき激しい自傷行動が観察されている。

(2) 症例 2 (D.I.)

養護学校高等部3年生である。個別指示は直ちに従うことができるが、全体指示には少し遅れて反応する。新しい課題では全体指示に合わせて行動を開始するものの、具体的な指示内容の理解には他の生徒の観察や援助を必要とする。課題の遂行状況はかなり良好であり、作業や朝の会の役割などはスムーズに行う。その他に、作業に必要な道具の準備や後始末、掃除や整頓を指示されることなく周囲の状況に合わせ適切に行っていた。休憩時間などに他者に積

極的に関わっていく様子は観察されなかった。しかし、作業に関連して自分から他の生徒や教師に視線やジェスチャーで許可を求めたり、他の生徒の指示にうなづいたりしており、課題に関連して他者とやりとりを行う場面がみられた。現在の言語的な表出は、簡単な単語や単音レベルであり、その表出もエコーイック(佐藤, 1983¹¹⁾)が中心であった。自分から積極的に音声表出を行う場面は少なく、視線やジェスチャーなどを他者とのコミュニケーションに用いていた。一部の生徒にそれを理解し、本症例から視線が向けられた場合うなづくなどの対応を行っていた。ロッキング(身体を前後に揺らす)や胸の正面で両手を強く叩くなどの常同行動が観察された。この他に、唸る、頬を叩く、においを嗅ぐなどの行動がみられた。職場実習の見学は、実習先の都合がつかず実施できなかった。校内実習の評価は良好であった。卒業後の進路は、就職を中心に考えられており現在実習先への就職の話が進められている。しかし、家庭や母親には職場への適応について不安が強く判断に苦慮している。

(3) 症例3 (M.I.)

養護学校高等部3年生である。本症例は、職場実習先の見学が可能であったためその報告を中心に行う。実習は、自宅から徒歩通勤可能な神奈川県K市にある通所作業所H工房で行われた。指導員2名(女性)に10名(男子4名、女子6名)の生徒で構成されている。生徒の通所年数は2から5年であり、4名の生徒が会話が可能である。主な活動は、袋作り・袋縫い、ダイレクトメールの封筒はり、自主製品の作成などの下請けの作業である。実習は、朝8時半から午後4時半までであり、本症例は袋縫いを中心に行っていた。個別指示・全体指示とも音声指示だけに従うことは困難であるが、簡単なジェスチャーを伴えば理解可能である。複雑な作業も行うことができ、自分一人で行う作業は確実に遂行できる。単純な作業は20分以上取り組むことができる。また、短時間で作業の習得が可能である。しかし、他の生徒とペースを合

Table 2 各検査結果

検 査 名	田中ビネー		人物面検査	絵画語彙検査
症例	生活年齢*	精神年齢	精神年齢	語彙年齢
症例 1	19：07	—	—	—
症例 2	18：09	2：05	5：09	3：02
症例 3	18：07	3：00	7：11	2：00
症例 4	18：06	7：06	9：02	6：09
症例 5	17：08	—	—	—
症例 6	17：08	11：06	12：06	11：04

*調査実施時(歳:カ月) 症例1と症例5は検査を実施できなかった。

わせることが難しく共同作業は困難である。また、作業の仕上げが難であったり、生産性を高めるようにすることが難しいなどの問題があった。自由時間は1人でいることが多く、ときどき独り言を言いながら指導員や他の生徒に近づく程度であった。他の生徒と関わっている時間はほとんどみられなかった。作業中も他の生徒の指示に従わないなど孤立した動きが多くみられた。言語的な表出は、数語の限られた単語と単音の発声を中心である。その他に、養護学校中学部に指導された書字やジェスチャーがときどき観察された。しかし、伝達手段としては充分機能していなかった。作業所内で他の生徒と積極的に関わる時間を設け、簡単なジェスチャーやサイン、既存の発声を組み合わせてコミュニケーションを行うための取り組みが行われていた。問題行動としては、作業所でトイレに何度も行き、その度にトイレトーパーを全部巻き取りトイレに詰まらせることがみられている。これは家庭でも生じており、高等部2年時から継続して生きている。また、他者のことばかけが多いときや作業の中断時に自傷行動がみられることがある。場面に関係のない発声をしたり、作業が30分以上続いたり興味のない作業であると寝ころんだりすることも多い。

卒業後は、両親とも現在実習を行っている地域作業所入所を希望している。

(4) 症例4 (R.O.)

私立養護学校に入学し、現在高等部3年生である。高等部進学時から寮生活を行っている。

1 学年 24 名であり全員女子から構成されている。手芸の基礎的な技能の獲得を目標とする「技訓」と、能力別に行う「作業」を中心とした指導が行われている。個別指示でも全体指示でも理解可能である。手芸や裁縫に関する細かな指示も、言語指示で理解可能である。しかし、関心のない課題であったりすると指示を聞き逃すことがある。「作業」は、上位の能力クラスに所属しその遂行も良好である。授業もよく理解し

ており技術的な習得も速い。さらに専門的な技術を指導可能な段階である。ただし、習得には細かなステップに分けて指導する必要がある。寮での基本的な生活習慣、家庭への電話や簡単な買物など日常的なスキルは特に問題なく遂行できる。自由時間などに担任に接近し、簡単なことばのやりとりを行うことが何度か観察された。少しはにかんだような笑みを浮かべ話しかけることがあり、このやりとりを楽しんでいる

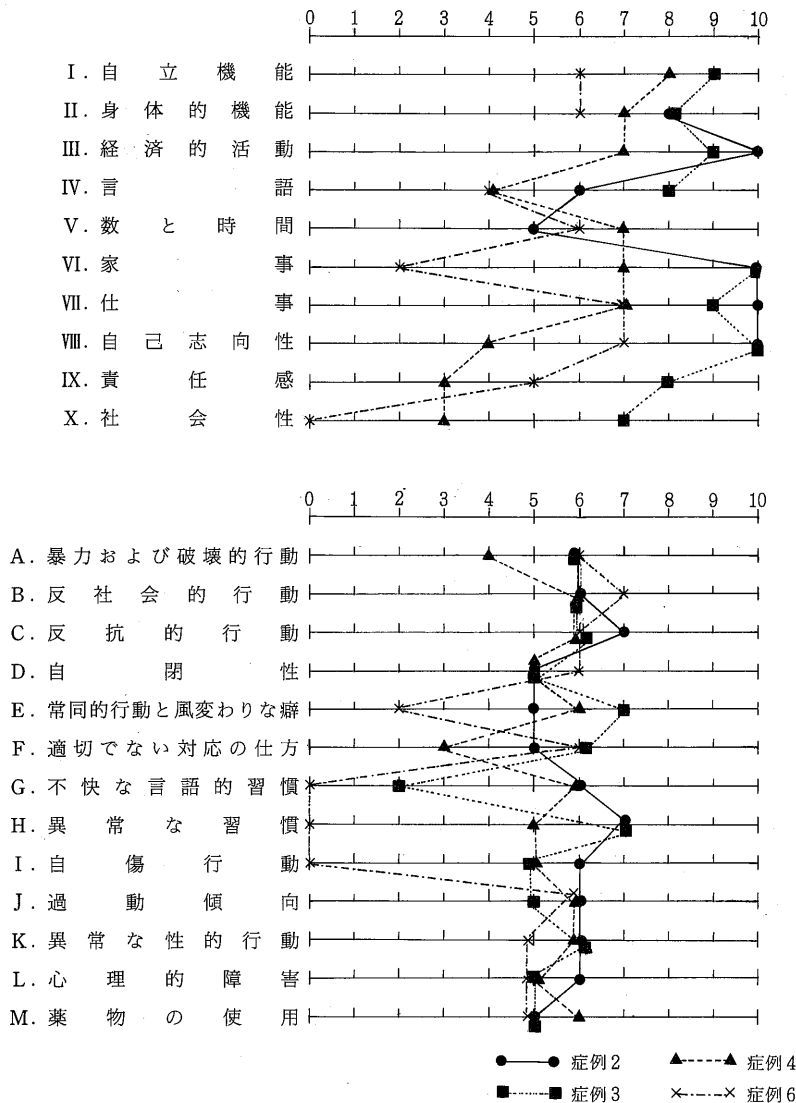


Fig. 1 各症例の適応行動尺度*のプロフィール

適応行動尺度 (富安・村上・松田・江見, 1973) による。症例 1 と 5 は都合により検査できなかった

ようであった。一方、他の生徒と一緒に過ごしている場面はあまりみられず、担任も友人との対人関係のとりにくさを指摘していた。高等部1年時にみられた特定の男性教師に対する接近は、現在それほど観察されていない。

言語能力としては、3語文程度の表出が可能である。担任や大人とは簡単な会話が成立する。しかし、同級生や寮の生徒とは十分な会話が成立するには至っていない。注意されたときに他者を突き飛ばす、次にやることを確認しないと次に進めない、きちんと整理されていないと落ち着かない、場面に関係のないことを突然話し始めるなどの問題行動がみられる。3年生の5月に、特技である洋裁の高等訓練を受けるために職業訓練校を受験した。訓練校が職場での社会性を重視しているため、知的には入学可能であるが、行動面や情緒面での問題により失敗した。現在、担任と両親の間でアフターケアセンターへの通所を考えている。

(5) 症例5 (A.K.)

1年間就学猶予したため、現在養護学校高等部2年生である。担任3名(男性1名、女性2名)と10名(男子6名、女子4名)の生徒から構成されている。2名は養護学校中等部、8名は他の中学校特殊学級から進学してきた。本症例以外は会話が可能である。カリキュラムは、クラス別の授業とボールペンの組み立てなどの作業から成る。個別指示には従うことが可能であるが、全体指示や全体で行う課題に従うことは困難であった。単一の指示で一連の行動を遂行することが困難であり、個々の行動の間に長い指示待ちがみられる。作業は、教師が側にいて個別に指導した場合は20分程度連続して取り組むことが可能である。校内実習でも、目標をもたせると約1時間程度は作業を遂行できる。作業中は全体的に落ち着いておりときどきロッキングがみられる程度である。しかし、指示されないときや課題が明示されていない場合に、すぐ着席したり活動に参加しないことがある。基本的な生活習慣、交通機関の利用や食事の準備、衣服の整理などの日常的なスキルにつ

いては主に家庭で指導がなされており、次第に可能になってきている。担任の接近や指導には回避的な動きはみられなかった。クラスメイトが手を差し出すとニコリとして手を差し出すことや、見学したスタッフに関心を示し接近することがあった。しかし、それ以外に自分から他の生徒や教師に接近することは少なく一人でいることが多かった。高等部に入り、特定の男性教師を目で追ったり保健室などでその先生が出て来るのを待つことがみられている。発語は、単音や限られた単語による表出が中心であった。事物の命名や要求時に、語頭音の表出がみられたり何等かの発声に伴うようになってきている。その他には奇声や反復動作時に発声がみられていた。課題が分からないときや課題の終了時に単音や呼びかけるような発声がみられるが、他者をコントロールするほどには機能してなく、対応がなされていないことが多かった。課題中や指示を待つ間に、ロッキング、机に頭を打ちつける、頬を激しく打つことがあった。その他に、唇をさわるなどの常同行動や、通学電車の型番にこだわるなどの行動が認められている。卒業後、両親は施設入所を考えている。本症例のクラスでは、2名の生徒に就職の可能性があり、6名が地域作業所に入所予定である。中学部から進学した2名は施設入所の予定であった。

(6) 症例6 (H.H.)

中学校情緒学級から養護学校高等部に進学し、現在高等部2年生である。学校訪問時に職場実習中であった。学校では、作業を中心に課題が行われている。おもにレザークラフト作成である。野球クラブに所属し時々音楽クラブにも参加している。

全体指示、個別指示ともに従うことができる。細かな作業についてもほぼ言語指示で理解可能である。作業の習得は早く、しかも確実に遂行できる。以前は、独自のペースで作業を行っていたが、1年生後半から流れを意識した行動がみられるようになってきた。現在、就労を目標にした持続的できめの細かい、そして計画性の

ある作業への取り組みがなされている。基本的な生活習慣、日常的な生活スキルは問題なく遂行できる。自由時間などは1人で過ごすことが多い。しかし、教師に言われればクラスメイトの手助けをすることができるようになってきている。現在、同じ学年に好意をもつ異性の存在が確認されている。教師や他の生徒と限定的ではあるが会話が成立している。時々奇声を発する、同じことを何度も繰り返して言う、融通性がないなどの問題があるが、他者のことばかけによって解決できるようになってきている。職場実習は、K電子有限会社で行っていた。K電子は従業員80人、ビデオ・CDなどのプリント基盤、その他の電子部品の製作を行っている。その中で、プリント基盤の特定の完成品と同じ部品を集め半田づけをする作業を行っていた。ピンセットなどを用いる細かな作業であった。実習中は本症例を中心に関わる担当の作業員がおり、仕事を教えながらペアで作業を行っていた。与えられた作業は確実にしかもミスなく遂行できる。作業しやすいように自分から工夫して取り組む。作業に必要な知識や理解、技能についてはほぼ問題がなく、危険なものに注意するなど安全面での問題も少ない。作業の準備・片付けもほぼ可能である。しかし、午前中と午後の作業能率が極端に違うこと、自分のペースで作業を行うため流れ作業についていけないこと、自分のパターンをくずさないことが問題にされていた。他の作業員と話をすることはみられなかった。作業中分らないところを聞いたりすることもみられていない。休憩時間はほぼ一人で過ごし、自分から話しかけることはほとんどない。ただし、他の従業員への態度に問題はなく、挨拶などはよくできる。全体の作業に混乱を起こすような問題行動はみられていない。実習になれるまでトランプをよくもってきたが、現在は持ってきていない。基本的な生活習慣は職場においても問題なく遂行できる。電車・バスを利用し1人で通勤でき、終了時刻が近づくと担当者が時間を見計らって支度をさせ帰宅させている。本症例は、高等部2年

生で実施される2回の実習と夏休みのアルバイトをこの会社で行っている。1回目の実習で評価が高く、会社の方で希望してアルバイトと2回目の実習を行うことになった。しかし、作業になれてくると能率が低下する、急いでやろうとしないなどの問題が生じてきた。また、作業に信用がおけないため担当者を常につけておかなければならないなどの問題も指摘されていた。会社も、1回目は就職の見込みありと積極的な評価であったが、今回はかなり消極的な評価であった。先の問題が改善されれば、他の従業員と同じように生産ラインに参加させることができ採用の可能性があるとしていた。

IV. 考 察

ここでは、先に検査結果と症例報告の結果についてまとめ、次にこの結果を踏まえて養護学校高等部2・3年生を迎えた自閉性障害児の学校適応の問題について考察を加える。

1. 検査結果から

高等部から本群に変更された症例6を除いて、各症例とも中度から重度の知的な遅れがあった。特に音声言語による表出が困難な症例2、症例3（症例1、症例5は検査未実施）は最重度の範囲であった。また、検査の種類によって精神年齢に違いが生じていた。言語性検査では、ほぼ田中ビネー検査と同様の値を示すのに対し、動作性検査では3から4歳程度高い値を示していた。一方、適応行動尺度は一部の領域を除いて良好な結果を示していた。第1部では、全体的に平均を大きく上回り、特に症例2と症例3は上限に達する領域が多くあった。第2部も、言語習慣や対応の仕方などの得点が低いものの、各症例ともほぼ平均以上の成績であった。

これらの結果は、先に報告された研究(小林・前川ら, 1984⁴⁾; 小林・前川ら, 1986⁵⁾)と同様の結果を示していた。すなわち、本報告の症例は、精神年齢に比べ社会生活能力が高いことが今回の結果からも確認された。

2. 症例報告から

各症例とも、作業・課題の遂行、指示理解と

も良好であった。呈示された課題を習得するまでの時間も速く、しかも正確に行うことができていた。加えて、症例2は作業の準備・片付けを自分から状況に応じて可能であった。しかし、細かな指示内容の理解が困難であったり、反応が遅れたりすることがあった。対人的な関わりは、各症例とも教師や友人に積極的に関わることは少なく、休み時間などはひとりで過ごすことが多かった。症例4は対人的な関心が見られてもわざと嫌なことをするなど年齢に比して関わりの未熟さが認められた。また、症例1や症例5は他者との積極的なかわりが必要とされる場面において自傷行動などの問題行動が出現するとしていた。コミュニケーションについては、症例6は日常レベルの会話が可能であり症例4もほぼ可能であった。しかし、残りの症例は単音から1語文程度の表出であり、音声言語を中心とした伝達に問題を示していた。また、サインやジェスチャー等の非音声言語的な指導は系統的になされてなく、他者とのコミュニケーションは未熟であるか、あるいは困難を示していた。

多くの症例から問題行動が観察された。症例1は、最近になり自傷行動が高頻度で観察されている。症例5も、課題間や指示待ちの時に自傷行動がみられていた。それ以外の症例も、他者を突き飛ばす、こだわり、常同行動などが観察された。この他に、職場実習などの場面で、きちんと物事を処理することへのこだわり、ゆっくりと仕事をすることができない、その反対に他者とペースを合わせることができないなどの問題もみられた。思春期を向かえ、多くの症例に異性への関心が報告されていた。ひとりでいる時間を増やしたり、自慰行為を教えるなどの対応が取られていた。女子3名とも自分で生理の処理が可能であった。今年度卒業を予定している4名のうち、3名は自宅近くの地域作業所に入所予定である。症例2は、就労の予定であったが卒業を間近に控えて、将来のことを考え両親が地域作業所への入所を希望した。また、症例4は職業訓練校への入学を希望していた

が、不適當とされたためアフターケアセンターへの通所の予定であった。

3. 総合考察

本追跡研究が開始された初期の研究(杉山・反保ら, 1979¹³⁾; 小林, 1977²⁾)において、学校適応を困難にする問題について、①ことばの遅れあるいはその異常、②対人関係、③学習能力、④指示理解などが指摘された。今回の結果もこれらの点を中心に考察を加える。

調査の結果、指示に従うことや作業・課題などの面は良好であった。また、基本的な生活習慣や簡単な日常的スキルも進歩が認められていた。このような状況は、適応行動尺度の結果からも示されている。

本群の症例は中・重度の知的な遅れを有するため教科学習については早期から困難を示していた(大野・古田ら, 1984¹⁴⁾)。そのため、主な学習内容を社会的自立を目指した指示理解や作業訓練などの学習に切り替えて行われてきた。今回の結果から示されたように、指示理解や作業遂行の面ではこれらの成果が得られたものと考えられる。しかし、学校適応に重要として認められた要因のうち、ことばや対人関係などの問題は、就学後高等部の卒業をひかえた現在でも大きな問題として残されてきている。対人関係は、他者から孤立性、関わりの未熟さがあげられる。問題行動も、以前から報告されてきたものに加えて、かつて消失したあるいは減少していたものが青年期を迎えて再び生起しているものがあつた。ことばの問題では、作業を行うために必要なことばや職場での人間関係を促進するようなコミュニケーションスキルの未熟さが認められた。また、これまでの追跡研究の結果からも、これらの問題に関する指導が系統的に考慮されてきていないことが挙げられる。これらから、就学前に認められた問題の改善には就学後も継続して取り組んでいかなければならないことが示唆される。

また、これまでの予後研究で指摘されてきているように、就学前の子どもの状態はその予後に大きな影響を与えることが知られている

(若林, 1983¹⁰⁾)。社会的自立を図るためにはこれらの問題について幼児期から積極的に指導・訓練を行う必要がある。加えて、これらは非常に複雑な問題であるため、その改善には長期にわたる一貫した取り組みが必要である。

以上から、これらの改善には従来から本研究の症例などに行われてきた治療教育プログラムに、長期的な展望にたったプログラムを構成し適用していくことが望まれる。加えて、年齢が進行するとともに地域社会との接触する機会が増加することもあり、これらのプログラムを実施していく場合、家庭や学校などが単独で行っていくよりもケースマネージメントの考え方(富安, 1989¹⁰⁾)を導入して、専門機関などと連携を図りながら協力して進めていく必要がある。

その他に、自閉性障害児の就労にあたって、作業所の絶対数、職場開拓の困難性、卒業後就労などで派生した問題に対する指導の限界など学校教育終了後の社会的な受け入れの問題も考えられる。今後の課題として、自閉性障害児の社会的な受け入れに関する検討とその要因の分析が必要である。また、これまでの学校適応を中心とした追跡研究からさらに職場での適応や結婚などの問題を中心とした社会的な適応に関する追跡を行い、自閉性障害児の長期的な予後について考慮する必要があると考える。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、三好紀幸氏(希望の家療育病院)、鷺見文彦氏(美浦養護学校)、大野裕史先生(埼玉短期大学)の協力を得ました。また調査にあたりまして、対象者のみなさんをはじめ、両親、作業所、教師の方々に御配慮いただきました。記して感謝いたします。

文 献

- 1) 古田真理・中矢邦雄・武蔵博文・森田智子・辻 正子・大野裕史・前川久男・小林重雄(1985): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VI(2). 筑波大学心身

障害学研究, 9, (2), 113-121.

- 2) 小林重雄(1977 a): クリニックと他機関との関係に関する諸問題. 行動療法研究, 9 (2), 27-33.
- 3) 小林重雄(1977 b): グッドイナフ人物画知能検査. 三京房.
- 4) 小林重雄・前川久男・大野裕史・加藤哲文・園山繁樹・古田真理・武蔵博文・佐竹真次・平田幸宏・近藤明子・藤原義博(1984): 自閉性障害児の学校適応に関する追跡研究. 安田生命社会事業団研究助成論文集, 19, 69-86.
- 5) 小林重雄・前川久男・杉山雅彦・大野裕史・佐竹真次・加藤哲文・園山繁樹・中矢邦雄・福井ふみ子・渡部慶子・渡部匡隆・石川泰・肥後祥治・鈴木瑞哉(1986): 自閉性障害児の学校適応に関する追跡研究(第2報), 安田生命社会事業団研究助成論文集, 22 (1), 63-79.
- 6) 武蔵博文・大野裕史・徳増久子・中矢邦雄・平田幸宏・鈴木真理子・古田真理・石川健・五十嵐隆夫・池 弘子・小林重雄(1983): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究IV(2). 筑波大学心身障害学研究, 7 (1), 39-47.
- 7) 中矢邦雄・武蔵博文・福島直子・大野裕史・前川久男・小林重雄(1986): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VII(2). 筑波大学心身障害学研究, 10 (2), 87-95.
- 8) 中矢邦雄・杉山雅彦・前川久男・小林重雄(1987): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VIII(2). 筑波大学心身障害学研究, 11 (2), 35-41.
- 9) 大野裕史・杉山雅彦・張 正芬・田中裕子・小林重雄(1980): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究II(2). 筑波大学心身障害学研究, 4 (1), 92-100.
- 10) 大野裕史・徳増久子・中矢邦雄・是永 仁・杉山雅彦・池 弘子・小林重雄(1981): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究III(2). 筑波大学心身障害学研究, 5 (1), 13-29.
- 11) 大野裕史・古田真理・平田幸宏・森田智子・武蔵博文・鈴木真理子・小林重雄(1984):

- 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 V (2). 筑波大学心身障害学研究, 8 (2), 92-100.
- 12) 佐藤方哉(1983): 言語行動の理論的背景. 日本行動分析研究会(編), ことばの獲得, 川島書店, 3-12.
- 13) 杉山雅彦・反保真弓・田中裕子・張 正芬・池 弘子・小林重雄・長畑正道・斉藤義夫(1979): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究 I (3). 筑波大学心身障害学研究, 3, 111-120.
- 14) 田中教育研究所(編)(1987): 田中ビネー知能検査法. 田研出版社.
- 15) 富安芳和・村上英治・松田 惺・江見佳俊(訳編)(1973): 適応行動尺度. 日本文化科学社.
- 16) 富安芳和(編)(1989): コミュニティ生活を創る. ぶどう社.
- 17) 上野一彦・撫尾智信・飯長喜一郎(1978): 絵画語い発達検査. 日本文化科学社.
- 18) 若林慎一郎(1983): 自閉症児の発達. 岩崎学術出版社.
- 19) 渡部匡隆・中矢邦雄・前川久男・小林重雄(1988): 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究IX(2). 筑波大学心身障害学研究, 12 (2), 69-75.
- 1990.10.11.受稿, 1990.12.10.受理—

Bull. Spec. Educ. 15(2), 87-96, 1990.

The Follow-up Studies of Handicapped Children with Autistic Symptoms concerning School Adjustment X(2) : in Special School for the Mentally Handicapped

Masataka WATANABE, Noriko KIDO, Yuji ETO, and Shigeo KOBAYASHI

6 autistic youths, who had been trained in our laboratory before the primary school, were evaluated with regard to adjustment to the class setting. Subjects were 2 or 3 grade in senior high school of special education for mentally handicapped. Data on the adjustment to the classroom were obtained from the following strategy.

1. (a) Intelligent Test, (b) Adaptive Behavior Scale (ABS).
2. Observations of the behaviors at the classroom.
3. Interviews with teachers and family members.

The results from Intelligent Test and ABS showed that their mental retardation were from mild to profound, and their adaptive behaviors were fairly good. Their instruction-following and task performance have been sufficiently developed. But their interpersonal behavior, communication, and behavioral problem have not shown remarkable improvement.

The results of the study suggested that it was important to develop and apply the improved training programs for autistic children.

Key Words: autistic children, follow-up study, adjustment to the class